

# COMPASS

京滋慶友会

2023年9月号

・森本 小規子(文Ⅲ)	「7月学習会 「石川均さんによる学習会－慶應通信で実学を学ぶ－」のご報告」	1
・A. Y. (経済)	「自己紹介と雑感」	3
・三芳 美樹(文Ⅰ)	「慶應通信の志望動機」	4
・菱田 彩巴(文Ⅰ)	「英語への苦手意識」	4
・Fabio Salvagno(経済)	「初めての夏スクーリング」	5
	「Bianco e Nero」	6
・進藤 美知子(文Ⅰ)	「2年目の夏」	7
・徳田 憲道(文Ⅱ)	「初めてのスクーリング 2023.8.6」	7
・徳元 泰孝(法甲)	「大屋雄裕法学部教授 講演会「公衆衛生と自由と正義」 (2023年6月10日) 要約」	8
・編集後記		10

## 7月学習会 「石川均さんによる学習会－慶應通信で実学を学ぶ－」のご報告

森本 小規子(文Ⅲ)

7月23日の定例会では、学習アドバイザーとして卒業生の石川均さんをお迎えし、慶應通信で学ぶことの意味について、また、ご自身のご経験から卒業論文についてのアドバイスなどを伺うことができました。

石川さんは、2011年に法学部に入学、2016年に卒業され、またその後2016年に経済学部に入學、2021年に卒業されたというご経歴で、神戸慶友会では会長も務められた方です。

お話は、卒業論文の進め方を中心に展開されました。テーマの決定の仕方、情報収集や資料の収集、またその整理の方法など実際的かつ実用的な方法を具体的に示していただき、卒業論文に今まさに具体的に取り組んでいらっしゃる方にはもちろんのこと、そこにはまだ程遠い初学者の私にも大変有益なアドバイスばかりでした。

4万字の卒業論文の完成には、幾つもの4千字のレポートを突破していかなければならないわけで、その意味にお

いて卒業論文は、日々のレポートをいかにしっかりと書いていくかのその先にしかないということ…私は石川さんのお話を伺いながら実に当たり前のことに改めて気付かされました。

4月に入学したばかりの私が、卒論のことを具体的にイメージすることは難しいのですが、石川さんのお話の中で幾つか書きとめ、参考にしたいと強く感じたことがありましたので、初学者の目線で恐縮ですが共有したいと思います。

一つ目は、教員は「卒業論文の目次と参考文献でその論文を評価できる」という言葉でした。これは科目のレポートでも同じなのだろうと思います。事実、私の場合、レポート作成において最も時間をかけるのは参考文献を探すことです。問いに関連する文献を探す中で、書籍、論文などまさに玉石混淆の資料の中から、何を選び何を選ばないかということが、レポート作成のほとんどを決定することに最近気付きました。与えられた問い、自分の興味関心、先行論文の有無など、作成するレポートに必要な様々な条件をクリアしていく資料や情報を収集し整理することは非常に難しい作業であり、しかし、好きな分野の新しい知識や発見を伴う作業は（時間の制約はありますが）やはり楽しいものです。石川さんのお話にあったように、卒業論文作成のために良い参考文献を選ぶ目を持ち、それをグループ化しアウトラインを作成する力は、山のような科目のレポート作成時、今まさに取り組んでいるこの作業の中で養われていくものだ改めて思いました。参考文献とそれをどのように組み立てたか（目次）を見れば、教員の方がその論文の質を容易に判断なさるのも当然だと感じました。

卒業論文を課さない通信大学が多い中、慶應の通信教育学部が変わらず卒業要件として卒業論文を課しているのは、この学びの糸がしっかりと入学から卒業まで繋がることを体得させるためなのだろうか、と具体的にお話を伺って初めて実感できたのは収穫でした。

二つ目に皆さんと共有したい石川さんの言葉がありました。それは「卒業式に出るイメージを常に持つ」というものです。既に2回卒業されている石川さんが、終始穏やかで丁寧な話しぶりの中に、このような熱い思いを抱いて10年間努力を重ねられたということにシンプルに感動しました。私のように、あとどのくらいレポートを書いて、試験を受けて、不合格になって、再提出を乗り越えて…そして本当に卒業式に辿り着けるのだろうか…と思う身には気が遠くなるばかりですが、うまくいかない時もスランプの時も、「卒業式に出るイメージ」を忘れないように心の中にしっかりと置いておこうと思いました。

また、他にも資料収集の具体的な数やどのようなメディアを活用すればよいか、論文の作り方、文献表の素晴らしい見本など、ここには列挙しきれないアドバイスをいただきました。お忙しい中、後輩のために時間を割いて愛情深いアドバイスをくださった石川さんに心より感謝の意をお伝えしたいと思います。

最後に石川さんが共有してくださった「慶應通信卒業十訓」を、僭越ながらここに皆さんに紹介し、私の報告を終えたいと思います。

### 「慶應通信卒業十訓」

- 1 目指すは、教養や知識より問題解決能力の向上にある
- 2 学業、仕事、家庭のバランスを崩さない
- 3 慶友会に積極的に参加せよ
- 4 履修計画、進ちよく状況を可視化せよ
- 5 初学者は体系的に学ぶため基礎科目から始めよ
- 6 レポートは取りあえず400字を書いてみよ
- 7 再レポを怖れるな、再レポは理解を深める

- 8 年4回の科目試験は必ず受けよ
- 9 参考論文を読みあされ
- 10 学位授与式に立つ自分を常にイメージせよ

以上

2023・7・27 京滋慶友会 森本 小規子



## 自己紹介と雑感

A.Y. (経済)

皆さんこんにちは、経済学部73期、A.Y.です。京滋慶友会の加入には以前より興味があったのですが、得意の先延ばしにより5年目での加入となりました。慶友会に参加させていただき、皆様の学習進捗を聞くことが自分を奮い立たせる良い原動力となっています。もっと早くから参加していれば良かったです。

さて、慶応通信を始めてから、痛感していることが2つあります。一つ目は、「計画的に物事を進める力」です。年初にエクセルで履修計画を立てますが、毎年その半分しか進んでいない状況です。計画したことが実行できない。これもまた自分の実力だと思っています。

二つ目は、「コツコツ積み上げることの大切さ」です。1日15分だけテキストを読もうと決めても、何かにつけ理由をつけ、なかなか続かないものです。たった15分が続けられないのです。レポートの締切日が近づくにつれ、続けていれば今頃・・・と思うことが何度もあります。地味なことを地道に続けられる力が求められていると、ひしひしと感じます。

今年も早いもので残り数か月ですが、上記2点を心に留めて学習を進めたいと思います。

(経済学部73期 A.Y.)

## 慶應通信の志望動機

三芳美樹(文I)

皆様、こんにちは。2021年4月(文I)に入学した三芳です。

私が入学したのは、コロナで世間がパンデミックに陥ってそれまでの日常が全てひっくり返ってしまったの2年目、振り返ると1番皆がピリついていた頃でした。慶應義塾大学(通信)で学びの機会があると知ったのは、以前務めていた大学に慶應義塾大学・通信教育課程卒業の社会人(今の私と同じ位の年齢の)の入学があった年です。当時の上司が「ここは卒業がとても難しいのよ。卒業されたのならとても優秀な学生さんね。」とおっしゃっていたのが、とても印象に残っています。もう10年以上も前のことです。「そんなハードルの高い大学、私は無理だあ」と思いつつ気になって調べたら案の定、大学案内の資料は無料でなく購入しないと手に入らないことや入試(課題提出)があることを知り、一応大手書店で資料は購入したもののハードルの高さに怖気ついてお蔵入りになっていました。その後、通信制の他大学(社会福祉学部)を卒業し、仕事柄、認定心理士の資格を得たいと考え、更に他大学の通信(人間科学部)に進み卒業しました。年月は過ぎ、紆余曲折しながらも前職を退職したのを機会に新たに別大学で教員を目指す学生の就職支援をする中、色々考えた末、出願期間ギリギリに入試課題を提出し2021年に何とか入学でき今にいたります。教育学を学びたいと考えて様々な通信制の大学を調べていたのですが、敢えてハードルの高い慶應の通信、卒業出来れば少しは(大いかな?)、自信にも繋がると考えて一步前進した次第です。

最近始めたネイティブキャンプのオンライン英会話を言い訳に大学のテキストから手が遠のいていますが、秋メディアのスクーリングを機会に再始動をしようと考えている今日この頃です。

## 英語への苦手意識

菱田 彩巴(文I)

私には英語に対して強い苦手意識があるのですが、そのきっかけは中学校、高校の英語の授業にあります。皆さんご承知の通り、中学校、高校で習う英語はあくまで受験勉強のための英語であって、授業では英語に関する文化的な背景などについて取り上げられることはほとんどありません。ひたすら英単語を覚えたり、日本語で文法を理解しようとすることに重点が置かれています。よって、私の場合は英語を楽しむというより、テストのために勉強するという義務感が強く、他の科目に比べて勉強量も多いため、苦手意識が強まってしまいました。このような英語教育で例を挙げますと、willからbe going toへの書き換えなど、異なる表現を同様の意味として書き換えさせる問題をよく解いた覚えがあります。結果、これらの表現の違いをうやむやにしたまま、海外旅行で現地の方と英語で会話する際、willとbe going toの使い分けを誤り、とても奇妙な返答をしてしまうなど、失敗経験が重なることで、英語への苦手意識はますます高まっていきました。ところが、今年の夏期スクーリングで英語(リーディングとライティング)を受講したことで、英語に対する見方が大きく変化しました。リーディング、ライティングともに英語のものの見方・捉え方を踏まえた授業で、英語話者の視点や考え方が日本語の場合とは大きく異なることを学んだことで、それまでよく理解できていなかった表現のニュアンスの違いなどが少し分かるようになったのです。また、授業で英語の歴史的、文化的な背景を解説していただいたことで、漠然とはありますが、英語の世界観を感じることができ、ただ敬遠していた英語に対し、興味をいだくようになりました。高校以前の授業でも、このような学習意欲や知的好奇心を刺激する内容であれば、より積極的な姿勢で英語を学習できていたかもしれません。ですが、授業中に先生が紹介されたあ

る考え方を聞いて、英語教育は私が受けてきたような内容になることが致し方ないようにも思えました。その考えとは、英語は喋り言葉でスピーキングを中心に成立した言語だが、日本語は読み書きを基礎とした視覚中心の言語である、というものです。この考えに沿えば、日本人が日本語の頭で設定した英語のカリキュラムでは、英語の読み書きに重点が置かれ、巷で問題視されているように、一向に英語を話せるようにならないのは自明です。それでも、受験科目としての英語学習ならば、これまでの英語教育は効率的だったのでしょうか。ただ、結果として、英語の面白さに気づかないままに英語を敬遠してしまう人を量産しているようにも思われます。スクーリングでの授業を通して、このような思いもよらぬ発見が得られたことで、これまでうまく言葉にできなかったもやが少し晴れたようでしたし、以前よりは英語に対する苦手意識を客観視できるようになりました。学びとは、このように視界が広がっていくことなのではないかと思った次第です。



## 初めての夏スクーリング

Fabio Salvagno(経済)

第1期は午前中に生物ラボ、午後には英語のライティングの授業がありました。生物は月曜から水曜、そして木曜から土曜に分かれ、それぞれ異なる先生が担当しました。授業は最初の約40分が講義形式で、残りの時間は顕微鏡を使って標本を観察とスケッチが主でした。土曜日の授業は、紙とのりを使ってDNAのらせん構造を作る実習がありました。工作は大苦手ですが、最後まで頑張り、先生からの即席の「試験」にも答えました。後期の先生は「授業時間内に課題を終わらせると評価する」と言い、11:30頃には「そろそろ片付けましょう」と声をかけてくれました。おかげで、早めに食堂へ行くことができ、12:30の混雑を避けることができました。

英語のライティングの先生はアメリカ出身で、授業はほとんど英語でしたが、途中から日本語の説明も増えました。前半は先生からの課題説明とライティング、後半はグループ課題と黒板発表でした。ライティングの際には、紙の辞書または電子辞書を使え、携帯電話とタブレットは禁止でした。生物のラボとは違い、英語の授業では生徒同士でコミュニケーションが取れ、お互いに質問を交わしました。授業の雰囲気はかなり明るかったです。評価は、授業中の3つのライティング課題、最終日の試験、出席と意欲によって総合評価されるそうです。

初めてのキャンパス生活が終わり、1期だけではもったいないと感じました。宿泊費や運賃を考慮しても、授業に直接参加できる良い環境があるので、少なくとも1期と2期を連続で取ると、より集中して勉強できます。京都に戻ってからも、「これから頑張るぞ!」という意識が長続きします。

「Bianco e Nero」

Fabio Salvagno(経済)



写真は梅田で撮りました。道に暗闇はありますが、光もあります。その光を辿って、道の奥に人と光があると表現したかったです。

## 2年目の夏

進藤 美知子(文I)

個人的には2度目となる2023年の夏期スクーリングに参加した。Ⅱ期に参加し、今年は午前・午後ともに受講が叶った。一日が講義で埋まるという何とも幸せな1週間。しかも、今回は慶友会のメンバーや先輩方と時間を共にすることができたため、とても心強く、楽しい時間となった。普段であれば、仕事・家事・学業にパンク寸前で走行しているためか、学業に集中できる時間、言い換えれば、学業だけすればよい時間は、期間中は必死なものの終わってみれば、あまり疲労感がない…。「不思議なものだなあ」と帰宅した翌日の日曜日にヒシヒシと感じた。「帰宅後に感じたあの感覚を維持するぞ!」と誓ったものの、9月上旬すでにもう現実に引き戻され、以前と変わらぬペースである。

### 「初めてのスクーリング 2023.8.6」

徳田 憲道(文II)

昨年度はコロナの影響が出ていて、申し込みはしていたが、家族に入院者がいることもありキャンセルした。残念ではあったがしかたなかった。本年は四科目申し込み、第一期のスクーリングに参加した。科目は「歴史(西洋史)」と「ドイツ文学研究」だった。いずれも定員なしだったので履修許可が出た。第三期の方は所用で履修取消した。

これだけ長く逗留することはなかったので、準備の段階から持ち物準備をどうするかリストアップした。旅行なら衣服が中心になるので軽いのだが、今回は書籍や文具が要る。スクーリングシラバスに書いてある参考書を全部持っていくことなどできなかったのも、どうしても必要な本だけ詰め込んだ。

ただ、塾生ガイドを持参するべきだったと反省している。

運良く協生館という大学の厚生施設に宿泊できるようになって、田舎者の私にとって通学は悩まなくてよかった。協生館は、一階にコンビニがあったり、ランドリーがあったりして外へ出なくても良く、また日吉駅には東急があり、何かと便利であった。

西洋史担当は舟橋倫子先生だった。歴史を学びたいと思っている私には総合自由科目とはいえ、どうしても受講したい基礎科目だったので一番前の席で拝聴した。ギリシャローマから始まり、ヨーロッパとはそもそもどの地域を指すのかなど、高校の世界史の授業では聞けなかった内容だったので、一週間通して大変興味深く聴けた。スライドや動画もふんだんに示されていてとてもわかりやすかった。実際の講義はこれが醍醐味だと思う。たまたま、テキストで西洋史概説Ⅰを勉強していたので、中世の農業や中世社会の説明は理解できた。ベースを持ってスクーリングを受けることも大切だと思った。歴史専攻をされる方にはお勧めだと思った。

午後からはドイツ文学研究だった。本年はとくに暑かったこともあり、午前と午後の二科目連続はちょっとしんどかった。でも、こうでもしないとせっかくの上京がもったいない。先生方は汗を拭きながらで、もっと大変だったろうと思っていた。

この科目担当の西尾宇弘(たかひろ)先生の講義は文学の講義と思っていたが、ジェンダーや人種、公共圏といった社会学的視点からドイツ文学を見ていくものだった。先生の頭の回転が速いせいか、私の年のせいか、お話しスピードが速く内容に十分ついていけないとは言えない。ただ、ドイツ文学の作家についてありきたりの説明を受けるのと違い、今日的視点から文学研究をしていることに驚いたと同時に、ジェンダー論や人種問題、政治、社会学的アプローチから文学を視ることはとても新鮮だった。シラバスに特にドイツ語の知識は必要ないことが書いてあったが、やはり文学史ぐらいは本を読んでおけばよかったと思った。内容は総じて難しいが、ドイツの歴史、文化の知識があれば、この先生の科目もお勧めである。

二科目だけだったが、大学の学問レベルがとても高いと感じたし、一流の大学の講義を聴けたことは刺激になったし、経験できないありがたいことであった。また、最近ほどの大学もしていることらしいが、講義の最後にリアクションペーパー（感想・質問メモ、多分出席カードも兼ねる）を書けるようになっていて、自分の感想、質問を講義の最後で書くことができた。そのカードを基に翌日の講義では質問に対する先生の丁寧な回答から始まるのだが、出席している者にとって参考になることがあり、疑問解消に役立った。先生方の誠実な回答に頭が下がった。

最後日の試験は、両科目とも与えられたテーマがいくつかあり、そのうちの2つ程度を選んで論ずる形式で行われた。論述内容は、講義をしっかり聞いて復習していれば何か書ける印象であった。

西洋史については、多少の知識がありなんとか2つのテーマについて書くことができた。しかしドイツ文学研究は基礎知識のまったくないところで聴き続けたこともあり、私の復習が十分でなく、見当違いのことを書いてしまったのではと思う。試験はないとシラバスに書いてあったので焦った。

ただ、ドイツ文学研究の先生はコロナに講義前三週間に罹って快癒されたあとで、まだときどき咳をしながらもマスクをしながら熱心に論じてくださったので感動した。最後の日は試験を実施したあとに講義の時間を30分以上超えて教えてくださった。基礎知識があればどんなに有益だったかと思った。

私の初めてのスクーリングは一期だけで終わったのは残念であったが、たいへん充実した一週間だったと思う。とてもためになった。最後に、担当の先生方とスクーリングの機会に食堂に集まって会えるようご配慮下さった京滋慶友会の会長さんと学友に感謝したい。

## 大屋雄裕法学部教授 講演会「公衆衛生と自由と正義」（2023年6月10日） 要約

徳元泰孝(法甲)

法哲学とは、法はいかにあるべきかということを追及する学問でもあるので、社会や技術の変化により現れる法的な間隙や課題に対処するための方法についても哲学的に考究を行います。公衆衛生は常に、実施の際、個人の自由との間に緊張関係を持つこととなるので、自由に関わる重要な思想、すなわちベンサム功利主義、J.S.ミルの危害原理といったリベラリズムの思想に加え、各国の体制、歴史等について検討し、自由の範囲、正義の所在について見定めることは、公衆衛生を取り巻く問題を理解するために必要な、基礎的な視点を得るための一助となります。19世紀のイギリスにおいて、エドウィン・チャドウィックが携わった、大都市への人口集中による環境の悪化を改善する衛生改革を目論んだ「公衆衛生法」、並びに、困窮の予防を目的とした衛生環境の向上が盛り込まれた「救貧法」は、画期的なものでありましたが、疫病の感染を予防し、困窮者を救済するという目的のもと、強制的な都市改造や、困窮者の施設収容を行うことにより、公益と私益の相克を生み、公益を増大させる半面、個人の自由の制限へとつながる側面を持っていました。ベンサムが述べた「最大多数の最大幸福」や、ミルの「危害原理」は、国家による個人の自由への介入の様態、その限界について、多くの示唆を含んでいます。しかし、自由と統制のバランスを決定する判断基準は、19世紀と現代とでは大きく異なります。現代における個人のエンパワーメントと影響力の増大、活動領域の重層化は、自由を制約する場面を増やすこととなり、統制の拡大を齎しています。そうした動きの中で、個々人が他者に対する潜在的なリスクとなり、場合によっては大がかりな対策で、実際に表面化したそのリスクに対応しなければならないことを、衆目の前に明らかにしたのが、新型コロナウイルスのパンデミックでした。当時、パンデミックに対する国家的な対処の方法として、自由主義型、権力主義型、その二つの中間的な型という、三つの型に大きく分かれました。新型コロナウイルス発生初期においては、しばらくの間、権威主義的な方法が実地において有効であり、個人の自由を優先する自由主義型は、権力主義的方法に比して劣るという意見が支持を得る傾向がありました。かつて19世紀にも、種痘の接種に対する、良心的拒否の承認が認められたことがあります。それと同じように、公衆衛生は、個人の自由の尊重とのバ



ランスにより、その達成が脅かされるリスクに直面していたのです。そうしたことから、結局のところ、公衆衛生を行うことにかけては、権威主義的な体制が望ましいのではないかと考える向きもありますが、権威主義的国家はその情報の信頼性が不確かであり、正確さを検証できないことや、短期的には成功しようと、長期的には、統制の歯止めが効かない危険があり、そして何より、社会の可変性、創発性を封じ込める傾向があることから、自由と公衆衛生の両立を、社会的合意をもとに達成することを目指す、中間的な方法が、実際において現今では最適な方法であると言えます。ベンサムによる、同性愛に関する文書が死後出版されたように、女性参政権を掲げたミルが、選挙で落選したように、その時には存在しなかった規範を、「あるべき」だと言った人々の出現、及び評価は、創発性を否定するような社会では難しいでしょう。権威主義的な体制はこうした点について問われるべきであり、私達の将来のためにも考究すべき問題なのです。

(聴講者からの質問)

—ロンドン大学で、ベンサムの遺体はどのように保存されているのか。

化学処理を施され、人工的なミイラとして保存されています。当地にて、「ベンサムさんに会いに来ました」と伝えられ、快く部屋へ通してくれました。そこでの会議録には今でも、「ジェレミー・ベンサム欠席」と記述されています。

—法哲学的には、移民に関する法はどうあるべきか。

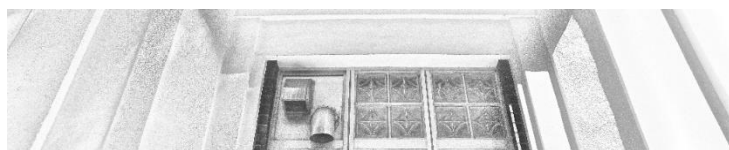
一つの政治共同体の中における正義だけでなく、ある区域とある区域との関係を含めた正義について深く考慮する必要があります。それは、ある時間を生きる人と別の時間を生きる人との関係に模して捉えることもできます。ロールズの正義論の中でも、今生きている人の保障と、未来に生きる人の保障との平等の問題は入っていませんでした。たとえば、今生きている人たちが作った借金を、後世の人たちが返済する義務はどこから来るのでしょうか。今生きている人たちが行った環境破壊による天災に後世の人たちが直面することは、正義という視点から見れば、不公平ではないでしょうか。共同体の中に限って考えたとしても、実際、共同体のメンバーは不変ではなく、あとから入ってくる人たちもいます。更に、頭脳流出、国境管理といった問題についても、検討しなければなりません。

—何をハラスメントとするかについて、その基準の境界線が動いていると思う。ハラスメントについて、法哲学ではどのように考えるのか。

ハラスメントは、パワハラといった直接的なものと、環境的な、いわゆるニューサンスによるものとの分けることができます。ニューサンスとは、近接している他者の幸福追求に悪影響を及ぼし得るもので、典型的な例は、悪臭や騒音、振動です。ニューサンスへの対応手段は多くの場合、警告や、ゾーニング、つまり空間的な分離です。行動や発言の規制によることが多いのですが、あまり濫用されると、表現の自由の不当な制限につながりかねません。でも、だからといって、一辺倒に、規制してはならないということにはなりません。女性がにくい場所を作るとか、そうしたことはニューサンスにあたる可能性があります。法学部の授業だと、嫌な話もしなければいけないときがあります。そういうときに、これから嫌な話をします、と言うべきなのか。そのあたりを考えていくことは、ハラスメントの境界線について考えることにもつながります。

以上、講演会当日に速記したメモをもとにまとめました。

「聴講者からの質問」では、永井さんのメモを参考とさせていただきました。ありがとうございました。



## 編集後記

夏スクーリング、お疲れ様でした。会員の皆様と楽しい時間をともにすることができて、素敵な思い出ともなりました。スクーリング中、色々な人に、夏スクの過ごし方、勉強法、その生活の様子をお聞きすると、やはりその人それぞれのスタイルや嗜好によって違いがあり、そんな方法もあるんだな、と感心することが少なからずありました。夏スクに限らず、生き方も、勉強の仕方も十人十色ですが、忘れるべきでないのは、慶應通信学生としては、石川さんの「慶應通信卒業十訓」にある通り、「学業、仕事、家庭のバランスを崩さない」ことが肝要だということです。卒業へ至る一步一步を、確実に、ともに踏み出していきましょう。今号にご寄稿していただいた皆様、ありがとうございました。（徳元）

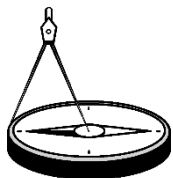
会報誌 COMPASS No.70 2023年9月号

発行 京滋慶友会

編集部

徳元 泰孝

松林 貴子



無断での転載・複製を禁じます。All rights reserved.